

日本における大学ライティング教育の変遷

—プロダクト、プロセス、脱アカデミア—

西谷内博美*

Transition of the University Writing Education in Japan

—Product, Process, and de-Academia—

NISHIYAUCHI Hiromi*

Abstract

This article illustrates the historical changes of university writing education in Japan. The transition will take place in three phases: product, process, and de-academia. Taking a step back from the process approach, which is generally appreciated, this paper aims to reach a broader perspective to understand the essence of Japan's university writing.

キーワード：大学のライティング教育，学術論文，アカデミア，大学の大量化

Keywords：University writing education, Academic paper, Academia, Universalization of the university

1. はじめに

指導教授が直接学生のために論文の書き方のABCから手を取って教へなければならない事が毎年続く。これでは教授の方が全くやり切れない。(大島 1930)

日本の大学ではいまライティング教育が盛んに試行錯誤されている。それは後述するように、1990年から本格化する大学の大量化（ユニバーサル化）による影響が大きい。しかし大学におけるライティング教育の必要は特別に新しい問題というわけでもない。冒頭の引用は、昭和5年、九州帝国大学教授の嘆きである。約100年前に発せられたとは思えないほど、現代の多くの大学教員が彼に共鳴する

のではないだろうか。これは新しいようで古い問題なのである。

そうとはいえ、「大学生が論文の書き方の基本をわかっていない」という同じ言葉を用いたとしても、昭和5年の大学教員と、令和4年の大学教員が直面している問題状況は異なる。本稿ではこれをプロダクト（作法の指南）とプロセス（研究主体の育成）のフェーズの違いと捉える。さらにその変化を追ってみると、どちらにも属さないもう一つのライティング教育の存在もみえてくる。それを脱アカデミアのフェーズと呼ぶ。本稿では、日本の大学ライティング教育の変遷を、先行するアメリカの変遷になぞらえながら、そしてアカデミアという軸で分析することで、プロダクト、プロセス、そして脱アカデミアのフェーズに分けて論じる。それらのフェーズは順番に登場するが、順番に消えていくようなものではなく、現在も重層的に存在している。

*工学部人間科学系非常勤講師 Part-time Lecturer, Department of Humanities, Social and Health Sciences, School of Engineering

日本の現代的な大学ライティング教育の変遷については井下（2008, 2021）に詳しい。1980年から2020年までの変遷が教育内容の変化に則して分類されている。ここは極めて重要な時代変化であり、ここを理解することは、実際のライティング教育を実施したり発展させたりするうえで大変重要である。本稿はしかし、この時代から一步引き、とりわけアカデミアに注目して、日本の大学ライティング教育の変遷を捉えなおす。そうすることで、大学ライティング教育の使命（目的）および欧米由来の作法や技法との向き合い方などについての新しい見通しが得られると思うからである。

変遷を捉える上でアカデミアを軸とするのは、現在の大学ライティング教育の議論において、しばしばアカデミアの視点が欠如している場合があるように思われるからである。ここで「アカデミア」とは「学術的な言説共同体」の意で用いる。大衆化した大学では学生の基礎リテラシーが低下し、プロダクトやポストプロダクトアプローチなどといわれるように、ライティング教育の関心が、学術的な知的貢献よりも学生の成長へとシフトしてきたと説明される。そうとはいえ、アカデミアへの指向性を維持するのでも手放すのでも、それとの距離を意識することは、授業を計画したり、学生を動機付けたりする上での指針となるはずである。なお、本稿では「プロセスアプローチ」を、通常考えられているより広くとらえる。認知プロセスに注目した教育モデルではなく、教育手法はどうあれ、書く（すなわち研究する）プロセスへの教育的介入と捉える。

2. プロダクトフェーズ：作法の指南

さて現在、日本のライティング教育では、たとえば「パラグラフライティング」など、横文字の輸入概念が多く用いられる傾向がある。それに対して、日本語や日本の伝統的な文章スタイルとの齟齬が懸念される場面も散見される（山根 2019；小笠原 2019；渡辺 2013: 143-148）。ところで、パラグラフライティングではないところの、日本流の論証の仕方とはいかなるものだろうか？その問いには答えられないが、本節では、そもそも日本の学術論文の書き方というものが、日本の伝統を守ってきたと

いうよりも、欧米流を模倣するところから始まったことを明らかにしておきたい。

2.1 アカデミア科学の成立

まずはヨーロッパで生じた科学革命に遡っておこう。かつて「科学研究は貴族の趣味、紳士のたしなみ」だったという（保田 2021: 2）。そうした「ジェントルマン科学」から「アカデミア科学」へのシフトが 17 世紀にはじまる。アカデミア科学では、実証主義を思想的基盤とし「合理性に基づく知によって自然界の物質、物体、現象を…正確に表象する」ことが目指されるようになった（保田 2021: 3）。そこで科学論文の書き方が大きく変遷した。それまでの書き手中心ではなく、対象中心の客観的な語り方（ディスコース）が好まれるようになる。一人称の使用、主観的、あいまいな表現を避け断定的に事実を記述するスタイルである（保田 2021）。この客観的な記述スタイルについては、ライティング教育の最新動向との関係で再述することになる。

世界で最初の学術雑誌が 1665 年にフランスで創刊された。その後ヨーロッパを中心に、17 世紀には 27 誌、18 世紀には 755 誌が創刊されている。しかしこれらはいずれも短命であり、今日のように原著論文を多く含む専門的な学術雑誌が出現するのは 18 世紀末になってからである（山崎 1986）。つまり、日本だけではなく世界的に、今日的な「学術論文」が誕生したのは比較的最近のことである。

2.2 日本の近代学術研究のはじまり

さらに時間が下り、1870 年以降に学術雑誌の創刊が急速に増えた。その「研究発表の活発化の時期」に日本は「辛うじて間に合っ」て参入したと上田修一は指摘する（上田 2011: 1）。幕末以降に日本から欧米への留学が盛んになる。ドイツについて言うならば、ドイツ 17 大学における日本人登録留学生数が 1870 年から 1893 年までに 1,463 名に達したという。留学などを契機として、日本人が海外の学術雑誌に論文を掲載するようになる。1875 年（松本銚太郎：化学、長井長義：薬学）を皮切りに、1883 年（小藤文次郎：地質学）、1884 年（下山純一郎：薬学）、1889 年（長岡半太郎：物理学、北里柴三郎：細菌学）、1893 年（南方熊楠：天文学）、1894 年（津

田梅子：生物学)に日本人研究者による初期の国際業績がある(上田 2011)。このように、日本の近代学術ライティングの営みは明治時代に始まった。

そうした海外を舞台としたライティング実践と並行し、それと連動しながら、国内におけるライティング実践が始まる。初期に創刊された学術雑誌には、1873年『明六雑誌』、1877年『東京数学会社雑誌』、1880年『東京化学会誌』などがある(高田 1996: 189; 佐藤 1978: 216)。そして1877(明治10)年には東京大学が、続いて1939(昭和14)年までに9校(内地7校)の帝国大学が設置された。それらの大学では多くの学生が、学位論文や研究論文を生産することになる。このように、ヨーロッパを中心としたアカデミアの発展と連動して、日本の学術ライティングの営みは裾野を拡大した。

2.3 学術論文を書くための指南書の登場

日本において学術論文の執筆機会が増加すると、そのための指南書が登場した。近代学術論文の指南書であることが明確なものとしては、たとえば横地正国編(1906)『論文作法解』や高木武(1910)『論文の作り方』などがある。そうした初期段階の指南書の中では、田中曩麿『科学論文の書き方』が決定版と言えるだろう。1929年に初版が刊行されてから1987年の増補第32版まで、半世紀を超えて増版を繰り返したロングセラーである⁽¹⁾(裳華房 2012)。同書から、プロダクトフェーズのライティング教育というものに接近していきたい。

『科学論文の書き方』の著者である田中曩麿は1884(明治17)年長野県に生まれ、東北帝国大学農科大学を卒業する。同大学での助手や助教授、そして欧米留学を経て、1924年に九州帝国大学の農学部教授に就任する。そこで学生及び教員のために講述した原稿を元にして『科学論文の書き方』を刊行した(田中 1987)。図書としての刊行が要請された背景は次のようなものである。

一つに、その当時、論文作成に関するまとまった指南書がなかったことである。そういった書物は、「外国に二、三散見するもの」の邦書では存在しない。また雑誌に有益な意見が時として見られるものの、断片的であった(田中 1929: 1)。二つに、その結果として、学位論文や研究論文を執筆する学生に

とつても、それを指導する教員にとつても大変苦勞が多かった(田中 1987: iii; 大島 1930)。

本稿冒頭の引用文がその苦勞を物語ったものである。九州帝国大学で田中の同僚であった大島廣が、学会誌で『科学論文の書き方』を新著紹介する際に、当時の事情を次のように紹介している。大島自身は東京帝国大学で院生時代を過ごし、「先輩達の見様見真似でどうにか論文の真似のようなもの」を書くことができた。それでも、指導教員からは真っ黒に訂正添削されたものが返ってきたという。ところが教員の立場になって地方の大学に赴任してみると、そこには先輩というものがなく、「指導教授が直接學生のために論文の書き方のABCから手を取つて教へなければならぬ事が毎年續く。これでは教授の方が全くやり切れない」というわけである。だから、『科学論文の書き方』のような指南書が、「指導する側からも、被指導者側からも齎しく鶴望せられて居た」(大島 1930: 126)。学術論文を書く機会が、海外留学を経験した“超エリート”のみならず、より多くの“エリート”(当時の大学生)に拡大していたことが分かる。

次に指南書の内容に目を移そう。本稿の趣旨に照らして特筆すべきことは、第一に同書は海外の学術論文の書き方を強く意識した内容となっている。この書は必ずしも国際投稿を目指しているのではなく、邦文での執筆も想定されている。それにもかかわらず、随所に英語を併記したり、海外研究者の指南を引用したり、英語の例文をそのまま紹介したりしている(田中 1929)。つまり、日本における初期のライティング指南書は、日本流というよりは、欧米流(国際スタンダード)に準拠している。

第二に、現代的なライティング指南書と比較すると、同書はスタイルガイドにより近い。「構想」や「平素の用意」といった研究指南の項目もあるが、それらは観念的な記述にとどまる。同書が主眼を置いているのは、論文の構成と体裁である。特に、文献や図の示し方といったスタイル指南には力が入っている。

つまり『科学論文の書き方』が対象としていた大学の問題状況とは、大学生が、“研究”のABCはわかっているが(言い換えると、研究対象に対するオリジナルの問題意識があり、そこに自分の解を見

出すという研究のモードを知り、論証する力も備わっているが)、その研究成果をまとめるにあたってのアカデミアの流儀をわかっていないことである。よってこのフェーズのライティング教育とは、研究成果(学術論文の原稿=プロダクト)を起点として、執筆の作法に介入することになる。

3. プロセスフェーズ：研究主体の育成

3.1 アメリカのプロセス運動

やがて海外でも日本でも、大学の大量化に伴いライティング教育のあり方が変化する。いわゆるプロダクトからプロセスへのシフトである。プロダクト(論文原稿)に介入するのではなく、構想・草稿・推敲といった書くプロセスに、とりわけ認知プロセスに注目して介入する教育が主流となる。

アメリカでは、大学の大量化に伴う学生の増加と多様化に対する教育現場における必要から、1950年代にプロセスへの介入を重視する模索が始まり、1980年代以降に様々な制度や技術が発展したという(西口 2019; 森本 2022)。補足的に言うと、プロセスアプローチは、アメリカよりも英国でより早く発展していた。アメリカのプロセス運動を「後押しし、決定的なものにした」のが1966年に開催されたダートマス会議(ライティング教育者による国際会議)で、その際に英米の差異が明確になり、「自分の問題関心と学術的テーマを接続することは、必ずしも容易ではなく、また自明なことでもなかった」ことをアメリカの教育者が強く認識したという(森本 2022: 193)。

プロダクトからプロセスへのアプローチの変化に伴い、大学のライティング教育は、一過性の単発的な知識伝達の講述から、より組織的長期的なスパンでの学術訓練の場へと変化していく。既に学術的問題意識を持つ一部のエリートだけではなく、労働者階級や移民などを含む、あるいは読書や複雑な思考の習慣をもたない市井の人々を対象として、彼らを学術思考を持つ研究主体へと創り上げる人間形成の一大プロジェクトとなるからである。そのために、ライティング科目の創設、初年次教育の必修化、ライティングセンターの設置と、ライティング教育の体制も次第に大がかりになっていった。

この時代の大きなライティング教育の一事例として筆者の経験を紹介したい。筆者は2000年前後にアメリカの研究大学でライティング教育を受けた。**Critical reading and Persuasive writing**(批判的に読み、説得的に書く)をスローガンとする研究主体育成の修士プログラムである。最初にライティング、あるいは研究のABCを学び、その後の在学期間は、その考え方や方法論を繰り返し練習し体得するために費やされた。研究のABCとは、問いを設定し解を探究する研究のモード、エビデンスを収集し議論を構築する道筋、自分の解を理路整然と論証する作文技法などである。

プログラムの趣旨としては、履修する科目は何でもよく、重要なことはライティング理論に則して学術論文(学期論文や修士論文)を書き続けることである。そこでのライティングセンターの役割は、最初にライティングのABCを教えることと、その後の在学期間ではプリセプター制度(先輩院生によるマンツーマン指導)を介して書く技術を定着させることである²⁾。そのように、同大学では、研究主体の育成に向けて、ライティングセンターと他の専門学部が密接に連携している。このような訓練を経て、非エリートである(ハビトゥスとしての研究的態度を持たない)筆者も、それなりの研究主体へと成長できたと思う。達成度はともあれ、底上げの幅は著しい。その主体形成は、一過性の単発的な知識伝達の講述ではなく、組織的かつ長期的な学術訓練によってはじめて可能であった。

3.2 大量化時代の作文技法

大量化の時代に開発された作文技法の一つにパラグラフライティングがある。一つのパラグラフは一つの意味内容の塊であり、よってトピックセンテンスという中心文が一つだけある。そのトピックセンテンスはパラグラフの先頭に来るのが好ましい。それらトピックセンテンスは全て、上位の主張を支持する関係にある。といったパラグラフライティングの型に則して文章を配置することは、自分が何を言いたいのか、それはどのような根拠によるのかを考え抜くことでもある。すなわちパラグラフライティングは、書くためのツールというより、考える(研究する)ためのツールという効果が大きい。

そのパラグラフライティングは19世紀後半のスコットランドで始まり、その後20世紀後半のアメリカで今のかたちに洗練されたという。渡辺哲司によると、国語能力（「正統」な英語力）の低い人が多い「英語文化圏の“へり”」で発展したことが肝心である。それまでの作文技術は「特権的な人たちのみが、古代ギリシャ・ローマ時代から伝わる方法に従い、長年にわたる修練を積んで身につける」ものだった。それに比してパラグラフライティングは、国語能力の低い人でも実用的・機能的な文章を書くことができる技法として発展した(渡辺 2013: 136)。

そのパラグラフライティングが日本に入ってきたのが明治時代である。それ以前の日本の文章に段落は無く、「3世紀の吉田兼行の『徒然草』も、17世紀の井原西鶴の『好色一代男』も段落はない」(村越 2015: 5)。そして文部省がパラグラフを「段落」として国定教科書に取り入れたのが明治36年。つまり、「日本語特有な段落というものは最初から存在していなかったし、今でも存在していない」と村越行雄は指摘する(村越 2015: 7)。

とはいえ、現在「段落」と「パラグラフ」では含意が異なる。その違いについては次のような説明が分かりやすい。一つの「パラグラフ」は固い煉瓦のようなものできっちりと書かれる。ゆえに、それを積み上げて「ゆるぎない連結した文章を組み立てる」ことができる。「小→大」の流れである。それに比して「段落」は、まず文章があってそれを便宜的に切ったもの、「大→小」の流れである(村越 2015: 11)。同じことが、「形式段落」と「意味段落」の差異としても説明される。前者が形式的な一塊、後者が意味上の一塊である。ただし、英語の「paragraph」も形式段落から意味段落へと進化したということなので(村越 2015: 7)、日本語の「段落」も進化の過程にあるのかもしれない。

この議論から、日本の大学におけるパラグラフライティング教育の是非について、2つの示唆が得られる。一つは、日本でパラグラフライティングを教えることに、日本語の伝統と関連して危惧することはあまりなさそうである。そもそも、明治より前の日本に段落はなかったわけで、「段落」を受け入れたことがすでに「日本語の伝統をゆがめた」と解釈しうる。どうせ輸入概念であるなら、本来の目的に

則してさらに機能的に進化させることになんの問題があるだろうか。

二つに、パラグラフライティングを絶対視する必要もないことがわかる。パラグラフライティングは、言語能力の低い人でも伝わる文章を書くことができるようになる作文技法である。裏を返せば、執筆者の言語・作文能力に応じて、それが論証という目的を達成するならば、文章の型は自由に捉えてよいのだ。例えばベテラン研究者による論文が、パラグラフライティングではなくても、議論の筋がぶれずに一貫し、最後まで着実に議論が積み上げられている場合がある。もしも、パラグラフライティングには馴染まないところの、日本語に親和的な論証の仕方があるとするならば、それを発展させる余地は十分にある。ただし、作文初学者を対象とした大学のライティング教育においては、時間をかけて進化を遂げた作文技法であるパラグラフライティングを活用することが当面は効率的・効果的だと思われる。

3.3 日本における大学の大衆化

次に、欧米に次いで生じた、日本における大学の大学大衆化現象をみていこう。日本で最初の大学である東京大学が設立されたのが1877(明治10)年。その40年後、1920(大正9)年になっても大学進学率は2.2%であった(文部科学省 2004)。先述した『科学論文の書き方』が刊行されたのがこの頃である。この頃の大学が一部のエリート層のものであったことがわかる。

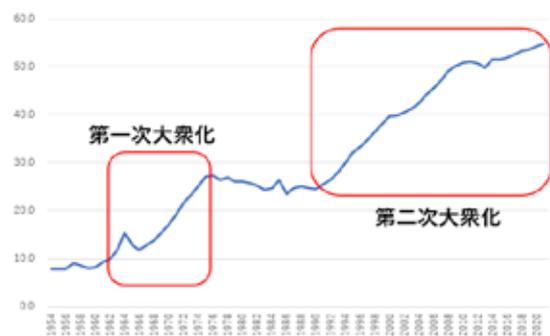


図1 大学進学率の推移⁽³⁾

大学進学率が10%を超えたのが1962(昭和37)年である。その後1976(昭和51)年の23.7%まで、第一回目の急増がある(図1)。これを第一次大衆

化と呼んでおこう。このとき「大衆化する高等教育の質をどのように維持・向上するかが大きな政策課題となり」、中央教育審議会答申（1971年）を経て「高等教育計画」（1975年策定）へと結びつく（文部科学省 2004: 2）。

第一次大衆化のあと、大学進学率は緩やかに低下するも 1990 年から再び増加に転じる。1990 年代後半には「18 歳人口の急激な減少に伴う大衆化（進学率の急激な上昇）や高等教育の多様化等によりその質について大きな不安を抱えることとなり、高等教育の質の確保が改めて大きな課題になった」（文部科学省 2004: 4）。その後も大学進学率が 2002 年に 40% を、2009 年に 50% を超え、「全入時代」に突入する。これを第二次大衆化と呼びたい。このように、日本の大学教育も、「大衆化（ユニバーサル化）」という変化の波にさらされた。

3.4 日本の大学におけるプロセス運動

大学の大学化に対する、おそらく現場の反応を反映して、日本語で発表された「大学ライティング教育」に関する研究論文数も右肩上がりに増加した（図 2）。大衆化の時期と重ねると、第二次大衆化が始まった少しあと、2000 年手前あたりからライティング教育の試行錯誤の増加していることが推測される。

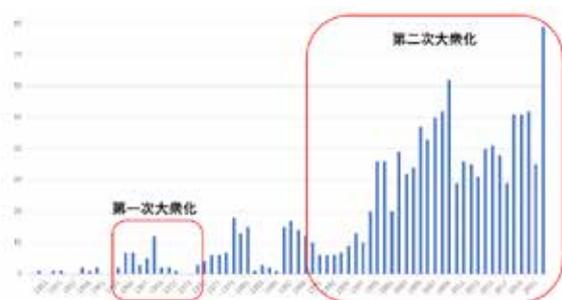


図 2 「大学ライティング教育」関連の論文数⁽⁴⁾

井下千以子は日本における大学ライティング教育（文章表現教育）の変遷を大きく 5 つの発達段階に分類している。1980 年代が黎明期。読み書き教育への意識が芽生える。1990 年代が草創期。日本語表現科目が開設され始める。2000 年代が普及期。初年次教育が急速に広がり、その一環として日本語表現科目が定着する。2010 年代が転換期。多様な

取り組みが模索される。井下はそれらを「学習技術型」「専門基礎型」「専門教育型」「表現教養型」に類型化する。2020 年代は発展期。「学習支援」「ディシプリン」「教養」という 3 つの要素の組み合わせを意識して指導方法を精緻化する段階だということ（井下 2008, 2021）。

これに依拠すると、日本の大学教育の現場で、プロダクトアプローチでは立ち行かないと意識されはじめたのが 1980 年代。アメリカと比較すると、30 年ほど遅れてプロセス運動がはじまったと捉えられる。そして日本でも、ライティング指導の試行錯誤やライティングセンターの導入など、さまざまな改革がいままさに進行している。

ところで、いみじくも井下が「文章表現」と表現しているように、現在日本の大学で実施されているライティング教育は（アメリカでも）、必ずしも学術論文の執筆を最終目標に置いているわけでもない。次節では大学ライティング教育の新しいフェーズに目を移そう。

4. 脱アカデミアのフェーズ

4.1 アメリカの表現主義論争

先に、近代化の過程で科学論文の書き方が、書き手中心から対象中心の客観的なスタイルへと変化したことを確認した（保田 2021）。大学とは、David Bartholomae が言うように、そのような先輩科学者のスタイルをまねて、たとえ未熟だとしても、アカデミアに参画する訓練をする場だと考えられてきた（Bartholomae 1986）。

ところが、表現主義とよばれる教育者たちがそれに異を唱える。Richard Boyd は明瞭である。アカデミアをモデルとするならば、学生が大学にもちこむ「よそ者」の言葉は否定され見下されてしまうと、教室空間の権力作用を指摘する（Boyd 1991: 340; 森元 2022）。そして、「学生が言説コミュニティへの参入を求めて大学に来る」との前提が間違っていると切り切る（Boyd 1991: 337）。

Peter Elbow はより慎重である。彼こそが、客観的ではなく主観的に、対象ではなく書き手を中心に書くことを推奨する先導者だが（森元 2022）、大学教育におけるアカデミアへの指向性を放棄してい

るわけでもない。少なくとも初年次教育においては、抑制的で几帳面で疑い深く書かせるよりも、自己中心的で馬鹿正直に書かせたい。二者択一なら後者を選ぶと苦渋の選択を示す (Elbow 1995: 73, 79)。

この論争からは、これまでとは質的に異なる問題状況が見て取れる。「大学生が論文の書き方の基本をわかっていない」のではなく、大学生がそもそも文章を書けない。さらに、大学生がアカデミア (学術世界) に関心がないか、あるいはそこから用心深く精神的距離を置いている。

そのように、アカデミアへの参画を目標として自明視できないとするならば、大学ライティング教育のあり方は大きく分けて二通り想定される。一つは、アカデミアからの一時的離脱であり、もう一つは完全離脱である。前者は、プロセスアプローチの延長と捉えられるし、後者は完全なる質的变化 (あるいは別の系譜) となる。

4.2 一次的離脱：プロセスアプローチの延長

日本に目を戻し、まずは一次離脱の例から見ていきたい。野田春美らは「文章表現Ⅰ」(前期)と「文章表現Ⅱ」(後期)という連続科目において、後期では学術論文の書き方を教えるが、前期をその準備段階と位置付けアカデミアから距離を置いている。そこでは「お知らせのメール」「レストランのメニュー」「場所や交通の案内」といった馴染みやすい文章を題材とした作文練習に特化している。読み手を意識してわかりやすく書くことや、自分がわかることは読み手もわかるはずというのは思い込みであることなどを学ばせるのだという (野田ほか 2010)。研究主体の育成を目指しつつ、しかし一学期分 (14 回) の授業をまるまるアカデミアから離れて実施している、脱アカデミアフェーズにおける一次離脱のわかりやすい事例である。

4.3 完全離脱：新しいタイプのライティング教育

ライティング教育の実践を探索すると、一時離脱なのか完全離脱なのか判断のつかないものが多い。そのなかで、後者であることが明確に示されている教育実践を一つ紹介したい。

川岸克己は次のような問題意識から、卒業論文指導において脱アカデミアを試行している。「学問研

究において、論文執筆は必須である。しかし、それは研究者にとってのことであり、多くの学生にとって、卒業論文の執筆は必須と言えるだろうか。現状の卒業論文指導は、学生も教員も時間と労力がかかる割には、「必ずしも教育的効果は高くないのではないか」。「研究者が書いている論文というものを、すべての大学生が卒業論文として執筆すべきであると当然視されてきた前提は再考の余地がある」 (川岸 2021: 2)。

このような問題意識において川岸は、OECD の「知識基盤社会」に必要な「主要能力」や日本の大学設置基準において求められている「社会的・職業的自立に向けた指導」といった現代的な大学教育への要請に基づいて、卒業論文指導の方針転換を試みている。具体的には、①問題発見解決技法、②対人技法、③自己管理技法の習得に力点を置いた (川岸 2021)。実際に完成した卒業論文が従来とどれほど異なるのかはわからない。しかし目指す先が、研究者コミュニティではなく職業コミュニティと明言されている点において、ライティング教育における脱アカデミア現象の最前線といえる。

5. まとめ

日本の学術ライティングの営みは、近代のアカデミア科学の胎動には間に合わなかったが、その誕生から参画し、世界とともに近代的・実証的な知的生産のよりどころとして発展してきた。これからも、世界と連動しながら、作文技法のさらなる精緻化や自己批判による軌道修正などを繰り返しながら、日本の学術ライティングの営みは続いていく。

そのような「学術的な言説共同体」に参画するために、日本の大学におけるライティング教育は始まった。レディネスの高いエリート学生を対象に共同体の作法を伝授するものとして始まり (プロダクトフェーズ)、次第により広い学生を対象として、共同体の一員としての資質を育成する大がかりな人間形成プロジェクトへと変容していった (プロセスフェーズ)。やがて大学のさらなる環境変化に伴い、ライティング教育は劇的な質的变化を見ることになる。とうとうアカデミアを目指すことから撤退し、よりパーソナルな個々の自己実現へと舵を切るケ

ースが現れる（脱アカデミアフェーズ）。現在の日本の大学におけるライティング教育は、プロセスアプローチが主だと思われるが、比較的プロダクトよりのものや、反対に脱アカデミア傾向の強いものなど、これら3つのフェーズが重層的に濃淡をもって混在している。

このように大学環境が多様化した現在、「大学のライティング教育はどうあるべきか」といった発展史的な問いはもはや発しがたい。論証重視か表現重視か、ライティングセンターが必要なのか、それにどのような機能を持たせるか、そのこたえは、各現場における、学生側のレディネス（その大学の問題状況）と、教員側の教育方針（何をどこまで目指すのか）に大きく依存するからである。

ところで、大学には職業訓練の場としての伝統的な系譜があるが、本稿はその系譜やそこでライティング教育を扱うことができなかつた。それは今後の研究課題とする。

参考文献 等

- (1) 1959年の第17版からは田中潔氏との共著であり（裳華房2012）、田中曩麿氏は1972年に逝去された。
- (2) シカゴ大学、The Master of Arts Program in the Humanitiesの日本入学版である。当プログラムとライティングセンター（Writing Program）との関係は厳密にはより詳しい説明が必要だが、ここでは簡略化して紹介した。
- (3) 文部科学省「学校基本調査」の2021年度版「進学率（昭和23年～）」の「大学（学部）への進学率（過年度高卒者等を含む）」の男女計の数値を用いた。
- (4) CiNiiにて、「ライティング教育」「ライティング授業」をキーワードで、またタイトル指定で「ライティング指導」「論文指導」「論文指導 大学」「レポート 指導 大学」「ライティング 指導 大学」「文章 指導 大学」「書く力 大学」でヒットした論文から、重複分および明らかにテーマ外ものを削除した数値である。拾いきれていない、反対に関係の薄い論文が含まれるという誤差は否めないが、それは年代に関わらず生じると思われるため、ライティング教育への関心についての一定の経年的傾向はつかめたと考える。
- Bartholomae, David, 1986, "Inventing the University," *Journal of Basic Writing*, 5 (1) : 4-23.
- Boyd, Richard, 1991, "Imitate Me: Don't Imitate Me: Mimeticism in David Bartholomae's "Inventing the University,"" *Journal of Advanced Composition*, 11 (2) : 335-345.
- Elbow, Peter, 1995, "Being a Writer vs. Being and Academic: A Conflict in Goals," *College Composition and Communication*, 46 (1): 72-83.
- 井下千以子, 2008, 『大学における書く力考える力——認知心理学の知見をもとに』東信堂。
- , 2021, 「大学のライティング教育研究の歩みと課題——大学教育学会誌40周年の動向から」『大学教育学会誌』43(1): 20-22.
- 上田修一, 2011, 「最初に海外学術雑誌に発表した日本人は誰なのか」「サイバースカラシップ下での学術コミュニケーションの総合的研究 研究成果報告会」慶應義塾大学。
- 大島廣, 1930, 「田中義麿, 科学論文の書き方, 菊版 129pp., 東京養賢堂発行, 昭和四年十月, 正價壹圓七拾銭」『動物学雑誌』42 (497), 126.
- 小笠原正明, 2019, 「井下及び大島報告へのコメント」『大学教育学会誌』41(1): 66-67.
- 川岸克己, 2021, 「PBLに基づいた論文指導」『安田女子大学大学院紀要』26: 1-9.
- 佐藤隆司, 1978, 「明治以降わが国学術雑誌の変遷」『ドキュメンテーション研究』28(6): 215-224.
- 裳華房, 2012, 「田中義麿 著『科学論文の書き方』（第2回全訂版 昭和28年）」, 裳華房メールマガジン 280号。
- 高田誠二, 1996, 「科学雑誌の戦前と戦後」『日本物理学会誌』51(3) : 189-193.
- 田中潔, 1987, 「増補第32版序」田中義麿・田中潔『科学論文の書き方（増補第32版）』裳華房, iii-v.
- 田中義麿, 1929, 『科学論文の書き方』養賢堂。
- 文部科学省中央教育審議会大学分科会, 2004, 「(補論1) 我が国高等教育のこれまでの歩み」『21世紀日本の高等教育の将来構想（グランドデザイン）（審議の概要）（案）』。
- 西口啓太, 2019, 「米国大学におけるライティング教育の歴史的変遷——1860年代から1980年代までの学習支援体制の視点から」『教育科学論集』神戸大学発達科学部, 22: 1-11.
- 野田春美・岡村裕美・辻野あらと, 2010, 「『文章表現』の授業内容の定着をめざして——『日本語を書くトレーニング』とアカデミック・ライティング指導の関連づけ」『人文学部紀要』神戸学院大学人文学部, 30: 23-46.
- 村越行雄, 2015, 「段落とパラグラフの構造と方法について」『コミュニケーション文化』跡見学園女子大学, 9: 1-27.

森本和寿, 2022, 「ライティング教育における『ヴォイス』——
高等教育における表現と省察に関する実践的検討」『大阪教育
大学紀要』70: 191-207.

保田幸子, 2021, 「科学論文における主観性——アカデミック・
ディスコース概念の再考」『日本教育工学会論文誌』45(1):
1-13.

山崎茂明, 1986, 「学術雑誌の発生」『病院図書館』近畿病院図
書室協議会, 6: 17-25.

山根正博, 2019, 「パラグラフ・ライティング指導の実践」『東
京学芸大学附属高等学校紀要』56: 7-12.

渡辺哲司, 2013, 『大学への文章学——コミュニケーション手段
としてのレポート・小論文』日本図書センター.